日本体育・スポーツ・健康学会
若手の会

vol.95
2025.06.01

若手研究者コラムリレー

菅原　大志（すがわら だいし）

プロフィール

新潟医療福祉大学　助教　／　東北大学大学院　博士後期課程
日本体育・スポーツ・健康学会の専門領域：体育社会学

1993年　宮城県栗原市生まれ
2016年　東北大学 教育学部　卒業
2018年　東北大学大学院 教育学研究科博士前期課程　修了
　　東北大学大学院 教育学研究科博士後期課程　進学
2023年　新潟医療福祉大学 健康科学部　助教

E-mail: daishi-sugawara@nuhw.ac.jp

調査地にて（筆者は前列右から2人目）

わたしの研究

農山村のローカルなスポーツ活動に込められた意味を考える

農山村では住民のスポーツへの関心・実施率等が比較的低調ですが、そうした農山村において住民の創意によりスポーツ活動を展開させている事例を対象に、スポーツ活動がなぜ、いかにして行われているかを調査しています。

政策文書等のさまざまな媒体において、スポーツは地域社会の「活性化」や「振興」、「コミュニティ形成」、「地域課題の解決」などに寄与するもの(すべきもの)として表現されています。こうしたスポーツに対する社会的期待について、多くのスポーツ研究は「そんなに簡単な話ではない」ということを指摘してきた一方、その社会的期待自体を相対化する作業についてはあまり行われてこなかったと思っています。

農山村で調査をすると、住民の方々が政策文書などと同様に「地域活性化」や「コミュニティ形成」などの言葉を用いてスポーツとのかかわりを説明することが少なくありません。しかし実際の活動場面においては、いわゆる公準の「地域活性化」や「コミュニティ形成」が想定するものとは異なる様子がみられることに関心を抱いています。

住民のこうした姿は、政策立案・推進側からみれば「失敗事例」に映るかもしれません。しかしそこには、諸資源の乏しいなかスポーツという「なじみのない」活動をも利用しようとする工夫と地域生活への不安や悩みが存在していることがわかってきました。「誰のための地域活性化」、「誰のためのコミュニティ」なのかを問うならば、住民の方々がスポーツを独自に意味づけ、地域生活の糧としていく姿から今後の地域スポーツのあり方を学ぶ必要があると考え、研究を続けています。

わたしの渾身の論文・書籍・記事

菅原大志. スポーツイベントにおける感情労働と住民対応―ボランティア住民のホスピタリティに着目して―. スポーツ社会学研究 30(1): 57-72, 2022.

（なんでも帳）

数年前に亡くなった私の祖父はトラック運転手をしながら週末は田畑を耕す典型的な兼業農家でした。夏には水田や水路で獲ってきたドジョウを食べさせてくれたり、冬に家の裏の池が凍ったときには竹を加工した手作りのスケート靴で遊ばせてくれました。体に染みついた技術と知識で何でもこなしてしまう祖父に憧れを抱いていました。祖父が感じているように自分も世界を感じてみたいと子どもながらに思っていたことを思い出します。

今、私には、田畑を耕したり、他の農家と共同して草刈りを行ったり、味噌や梅干しなどの保存食を自作したり、調子の悪い農業機械の部品の様子を確認したりする知識も技術も肉体的労働力もありません。その代わり、言葉を操る能力(それがどれだけのものかは別にして)を用いて何かを言ったり書いたりすることで生活を営もうとしています。

ここにおいて、私は祖父のようになれなかったと嘆いたり、あるいはならなくてよかったと安心するような態度は、どちらも祖父の人生における苦しみや葛藤、喜びを軽視した、無知で傲慢なもののように思います。またこうしたことを書きながら実際に転身する覚悟もない自分は何なのだろうかとも思います。

そうしたことを思いながら、各調査地ではそこにいる人びとがみている世界にできる限り迫ろうとしています(未だできている感覚はありませんが)。調査地の方々からはいつも与えられてばかりの立場ですが、調査地の方々に納得していただける形で何かを返せるのだろうかと考えています。

日本体育・スポーツ・健康学会 若手の会からのお知らせ

2018年8月に日本体育・スポーツ・健康学会若手の会が発足しました！→　メーリングリスト登録フォーム:
https://goo.gl/forms/zGMPdPq5fY3kcB5q2
学会大会、研究会等の開催や報告者募集に関する案内、公募や助成金情報等に関する情報提供を配信予定です。皆様からも、メーリングリストで周知したい情報がありましたら、下記までご連絡ください。
taiikugakkaiwakate@gmail.com